

平成 30 年 3 月 30 日

眼科に通院中の患者さんへ(臨床研究に関する情報)

当院では、以下の臨床研究を実施しております。この研究は、通常の診療で得られた過去の記録をまとめることによって行います。このような研究は、厚生労働省・文部科学省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の規定により、対象となる患者さんのお一人ずつから直接同意を得るのではなく、研究内容の情報を公開することが必要とされております。この研究に関するお問い合わせなどがありましたら、以下の「問い合わせ先」へご照会ください。

研究課題名 加齢黄斑変性の初回治療前視力の推移

研究責任者 滋賀医科大学 眼科 大路正人

(共同研究機関と施設責任者)

鹿児島大学	眼科	寺崎寛人
徳島大学	眼科	三田村佳典
奈良県立医科大学	眼科	緒方奈保子
兵庫医科大学	眼科	石川裕人
福井大学	眼科	高村佳弘
防衛医科大学	眼科	竹内大
三重大学	眼科	近藤峰生
山口大学	眼科	木村和博
筑波大学	眼科	岡本史樹
信州大学	眼科	村田敏規
名古屋市立大学	眼科	安川 力
聖マリアンナ医科大学	眼科	高木 均
東京女子医大糖尿病センター	眼科	北野滋彦
市立札幌病院	眼科	今泉寛子

研究の意義と目的

加齢黄斑変性は加齢に伴い黄斑(網膜の中心)が障害される病気で、後天性失明原因の上位であり、我が国での有病率は1.4%と報告されています。黄斑の萎縮がみられる「萎縮型」と、黄斑にもろい脈絡膜新生血管が形成され、それによる出血や血液成分の漏出をおこす「滲出型」に分類されます。

「滲出型」は進行も早く、著しい視力低下をきたします。

現在、滲出型加齢黄斑変性に対して主に行われている認可された治療は、光線力学療法(PDT)と、抗VEGF(血管内皮増殖因子)療法です。PDTは2004年に認可されました。日本で認可されている抗VEGF薬はペガブタニブ(2008年から)、ラニズマブ(2009年から)、アフリベルセプト(2012年から)でい

ずれも硝子体内注射(眼球に注射)で治療を行います。PDT以前には治療が難しかったこの病気への治療方法はPDTが開始されてから大きく変化し、それに伴い、視力予後も大きく変化しています。今回の研究は、初回治療前の視力と中心網膜厚と、治療方法別に見た1年後と2年後の視力及び中心網膜厚の変化を、全国規模で多数例で調査することが目的です。これらの結果により、今後の治療効果の予測、患者さんの治療方針の決定に貢献できると考えています。

1 対象となる患者さん

2006年4月1日～2015年12月31日に滲出型加齢黄斑変性と診断され、当施設で初めての治療を開始され、その後1年間以上当施設で診療を受けられた方。

2 利用するカルテ情報

年齢、性別、加齢黄斑変性の病型、治療内容、治療日時、初回治療前、1年後、2年後のそれぞれの視力、中心網膜厚を調査します。

個人情報の取り扱い

この研究について、研究計画や関係する資料、ご自身に関する情報をお知りになりたい場合は、他の患者さんの個人情報や研究全体に支障となる事項以外はお知らせすることができます。利用する情報にはお名前、住所など、患者さんを直接同定できる個人情報を含みません。また、研究成果は学会や学術雑誌で発表されますが、その際も患者さんを特定できる個人情報は利用しません。

※上記の研究に診療情報を利用することをご了解いただけない場合は、ご連絡ください。

【お問い合わせ先】

北海道札幌市中央区北11条西13丁目
市立札幌病院眼科